

(中学校) 特別の教科 道徳

1 改訂の趣旨・要点について

- 道徳は、学級担任が担当することが望ましいと考えられること、数値などによる評価はなじまないと考えられることなど、各教科にない側面があるため、「特別の教科」という新たな枠組みを設け、位置付けられた。
 - ・ 道徳科に検定教科書を導入する。
 - ・ 内容について、いじめの問題への対応の充実や発達の段階をより一層踏まえた体系的なものに改善する。
 - ・ 問題解決的な学習や体験的な学習などを取り入れるなど、指導方法を工夫する。
 - ・ 数値評価ではなく、児童生徒の道徳性に係る成長の様子を認め、励ます評価とする。

2 目標及び道徳科における見方・考え方について

- 道徳教育の目標と道徳科の目標を、平明な記述に改め、両者の関係を明確化した。

【道徳教育の目標】

道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、人間としての生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とすること。

⇒学校における道徳教育は、道徳科を要として学校の教育活動全体を通じて行うもの

【道徳科の目標】

第1章総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

【ポイント】

○ 道徳科の「見方・考え方」とは・・・？

深い学びの鍵となる道徳科の「見方・考え方」とは、道徳科の目標に示してある学習活動と同じであると言える。多様な事象を、道徳的価値の理解を基に自己の関わりで、広い視野から多面的・多角的に捉え、人間としての生き方について考えること。

(中教審答申 H28.12.21)

○ 「人間としての生き方についての考えを深める」とは・・・？

- ・ 人生の意味をどこに求め、いかによりよく生きるかという人間としての生き方を主体的に模索する。
- ・ 人間についての深い理解を鏡として行為の主体としての自己を深く見つめる。

○ 道徳科で育む資質・能力

道徳科で育む資質・能力は、目標に示してある道徳性そのものである。具体的には、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度のことである。

- ・ 人間としてよりよく生きようとする道徳性 (※学びに向かう力・人間性等)

○ 道徳科の学習活動を支える要素

- ・ 道徳的諸価値の意義及びその大切さなどを理解すること
- ・ 自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深めること

はつきりと分けられない

(※知識・技能、思考力・判断力・表現力等)

3 内容についての主なポイントについて

○ 内容構成の改善

- ・ 特別の教科道徳の第2に示す内容が、道徳科を要とした道徳教育の内容であることを明示した。
- ・ 小学校から中学校までの内容の体系性（系統的・体系的）を高めるとともに、構成やねらいを分かりやすく示して指導の効果を上げるなどの観点から、内容項目に手掛かりとなる言葉を付記した。（例）「自主、自律、自由と責任」、「節度、節制」など。
- ・ 内容項目のまとまりを示していた4つの視点について、生徒にとっての対象の広がり即して整理し、視点1 2 3 4から視点A B C Dとして順序を改めた。
- ・ 生徒の発達的特質（心身両面にわたる発達が著しく、他者との連帯を求めると同時に自我の確立を求め、自己の生き方についての関心が高まるとともに、やがて人生観や世界観ないし価値観を模索し確立する基礎を培っていくことなど）を考慮し、自ら考え行動する主体の育成を目指した効果的な指導を行う観点から、内容項目を重点的に示した。（内容項目の一覧表）

○ 内容の取扱いの工夫

- ・ 内容項目間の関連を十分に考慮したり、指導の順序を工夫したりして、生徒の実態に応じた適切な指導を行うことが大切である。（関連性をもたせること）
- ・ 1時間1時間は単発的なものではなく年間を通して発展的に指導すること、同じ内容項目を指導する際には、前年度の指導を本年度や次年度の指導の中に発展させることが大切である。（発展性を考慮すること）

○ 主な改善点

- ・ 内容項目が統合された。
（例）「2（2）人間愛・思いやり」「2（6）尊敬・感謝」⇒「思いやり、感謝」
- ・ 内容項目が分化された。
（例）「3（2）自然愛・畏敬の念」⇒「自然愛護」「感動、畏敬の念」

4 指導計画作成上の主な配慮事項について

- 道徳教育推進教師を中心として、道徳教育の全体計画に基づく道徳科の年間指導計画を全教師の共通認識の下に作成する必要がある。
 - ・ 学年ごとに主題（「ねらい」と「教材〈現行は資料〉」）を構成する。
 - ・ 全体計画の別葉（各教科等における指導の内容と時期を整理したもの等）を作成する。
- 道徳科においては、一つの主題を1単位時間で取り扱うようにする。但し、内容によっては、複数時間の関連を図った指導などを計画的に取り入れることもできる。
 - （例）一つの主題を2単位時間にわたって指導
 - （例）重点的な指導を行う内容を複数の教材により指導（教科書を使いながらも）

5 評価について

【道徳科に関する評価】

- 生徒の学習状況及び道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすように努める必要がある。道徳性の評価ではない。
 - ・ 数値による評価ではなく、記述式であること。
 - ・ 他の生徒との比較による相対評価ではなく、その生徒がいかに成長したかを積極的に受け止め、励ます個人内評価として行うこと。
（他の生徒と比較して優劣を決めるような評価はなじまないことに留意する。）
- ※ 道徳科の評価は、調査書には記載せず、入学者選抜に使用しないこと

6 移行措置に係る留意事項等について

- 平成31年度から新学習指導要領によることとした。平成30年度においては、新学習指導要領によることができることとした。
 - ※ 内容に応じた適切な教材を用い、所要の授業時数を確保して指導すること